

大東遺跡

2005.3

赤岡町教育委員会

大東遺跡

2005.3

赤岡町教育委員会

本文目次

目次(本文目次・図版目次)

| | |
|------------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯..... | 1 |
| 第2章 遺跡の環境..... | 2 |
| 第3章 調査の成果..... | 4 |
| 第4章 まとめ..... | 12 |

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

図版目次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1図 赤岡町の位置..... | 1 |
| 第2図 周辺の遺跡..... | 3 |
| 第3図 調査区位置図..... | 4 |
| 第4図 1区および2区造構配置図..... | 5 |
| 第5図 2区東端北壁土層柱状図..... | 6 |
| 第6図 1区調査区南壁土層図..... | 7 |
| 第7図 1区SD101～103平面図..... | 8 |
| 第8図 SK202土層図..... | 8 |
| 第9図 出土遺物(1)..... | 9 |
| 第10図 出土遺物(2)..... | 10 |

例　　言

1. 本書は赤岡町北部開発における造成に伴い実施された、香美郡赤岡町に所在する「大東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の期間は試掘調査が平成 15 年 11 月 11 ~ 12 日、本調査が平成 16 年 5 月 24 日 ~ 7 月 6 日までである。
3. 調査対象面積は約 3,000 m²であり、そのうちの本調査面積は約 530 m²である。
4. 調査体制
試掘調査
　試掘調査
　赤岡町教育委員会 教育次長補佐 近森 孝章
　高知県教育委員会 文化財課 畠中 宏一
本調査
　赤岡町教育委員会 教育次長補佐 近森 孝章
　高知県教育委員会 文化財課 坂本 裕一
　大旺建設株式会社 遺跡調査室 松田 重治
5. 試掘調査から本調査に至る機械掘削および現場管理については株式会社 技研施工の協力を得た。
6. 遺物の基礎整理一部に株式会社 技研施工の協力を得て松田がこれを実施した。
7. 本書の作成に関連して、遺物写真撮影は松田がこれを行なった。
8. 本書の執筆は、すべて松田が行った。
9. 本書の編集は赤岡町教育委員会の総括のもと、松田がこれを行なった。

10. 発掘調査および報告書編集作業においては、下記の方々の協力を得た。(敬称略、順不同)
岑 建右・伊野光一・内田尊人・大西敬哉・岡村健太郎・草道 満・小松忠司・津野容典
中澤元宏・中川真一・中村郁雄・福井良典・松村 信・水野一樹・岑 敏雄・立仙敦士
野村 隆・二神希代江
11. 出土遺物ならびに実測図面、写真は赤岡町教育委員会において保管している。
12. 遺構の遺構番号については、番号の左に調査区番号を付与し、3桁の数字で表記した。(例:
SD101, SK202など)
13. 遺物観察表中の凡例は、遺物観察表の冒頭に表記した。
14. 本書に掲載した遺物実測図について、須恵陶磁器類の断面を黒く着色することで土師器・土師質土器と区別した。
15. 本書に用いる高度値はすべて海拔であり、方位は磁北示す。
16. 発掘調査から報告書作成に至る過程において、下記に記す方々および諸機関から助言、ご教授を賜った。記して謝意を表する。(50音順、敬称略)
池澤俊幸 川田秀治 坂本裕一 津田光利 中川寅雄 森田尚宏
(術)本家アキ寅製瓦所 菊間町窯業協同組合
高知県教育委員会 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

第1章 調査に至る経緯

大東遺跡は昭和63年～平成元年に亘って実施された高知県遺跡詳細分布詳細調査(香美・長岡ブロック)によって確認された埋蔵文化財包蔵地である。この遺跡の周辺については平成9年と平成10年の2度試掘確認調査が実施されており、遺跡の範囲に隣接する部分からは弥生土器・土師質土器・土錐が出土している。

今回、町北部の開発事業において、現在の遺跡範囲内に企業誘致を行なうことになった。この事業に伴い、赤岡町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の協力を得て大東遺跡の試掘調査を行なって、本調査の範囲を確定することになった。

試掘調査は、平成15年11月11～12日の2日間実施した。調査対象地内の中央部に高さ3m以上の盛り土がすでになされていたため、比較的盛り土の薄い周辺部に、任意に2～4×4mのTP(テストピット)を4箇所設定して行なった。過去の試掘結果も含め、現在までに当遺跡において遺構は確認されていない。しかし、掘削したTPからはその量に多寡はあるものの、遺物の出土が確認されている。従って遺物包含層等遺跡に影響を与える可能性がある土木工事を実施する際には、影響を与える範囲・大きさによっては本調査を実施する必要があると判断された。

ところで地元住民のはなしによれば、かつて当遺跡内で瓦製造のための粘土を採掘していたらしく、その採掘坑が大きな池を形成していたようだ。その具体的な範囲は不明であるが、当然、遺跡も大きく搅乱されていることが予想された。



第1図 赤岡町の位置

第2章 遺跡の環境

赤岡町は高知県の中央やや東よりに位置する。東は香宗川を境として香我美町、西を吉川村、北は野市町に隣接し、南は太平洋に面している。

町内は町の中央部を逆S字形に蛇行して流れる香宗川によって南北に二分することができる。北部の大部分は香宗川右岸の堆積平野であり、その西側に須留田山等の小丘陵が所在する。南部は太平洋に平行に形成された2条の浜堤で人口密集地である。赤岡町で確認されている5箇所の埋蔵文化財包蔵地のうち4箇所は北部の小丘陵周辺に所在している。

赤岡町で出土した土器で最古のものは大東遺跡の弥生土器である。これらは過去の試掘調査で出土したもので、頸部に凹線文が施された中期後半頃と思われる壺の口縁部やタタキメの残る後期～古墳時代初頭のものとみられる土器が確認されたことが報告されている。続く古墳時代の遺物としては、分布調査でやはり大東遺跡で遺物が表掲されていることが報告されている他に、江見遺跡では畿内から搬入された古式土師器が出土している。

古代の赤岡町は宗我郷に属していた。同時代の考古資料としては御所の前遺跡で分布調査のときに確認された須恵器や大東遺跡で確認された平安時代の遺物がある。

中世の赤岡町の様相についても詳細は不明であるが、長宗我部地検帳の既述等によると南部は大忍荘、北部の須留田地区は香宗我部郷(古代の宗我郷)に属していた可能性が高い。鎌倉時代初期にこの地の地頭として赴いた中原氏を祖とする武田(後の香宗我部)氏は、南北朝時代には北朝方に属していたが、須留田城を拠点としていた須留田氏は同氏に属していたものと思われる。戦国時代になると、香宗我部氏は安芸氏との戦いに敗れて長宗我部氏の傘下に入ることになる。須留田氏はこの頃滅亡したと思われるが、詳細は不明である。その後香宗我部氏は長宗我部氏の滅亡とともに所領を失うことになる。この頃の考古資料としては、分布調査で確認されたハザマ遺跡・御所の前遺跡の土師質土器、試掘調査で出土した大東遺跡の土師質土器がある。

近世になると赤岡は製塩や織物の生産が発達し、商業の中心として発展することになる。古くから土器作りが行なわれていたといわれる須留田地区周辺では、元禄頃から瓦作りが始まられた。香宗我部氏の菩提寺として建立された与楽寺は参勤交代時の本陣とされ、測量のために赤岡を訪れた伊能忠敬は脇本陣長木屋を宿舎とした。また城下追放となつた絹金が身を寄せていたといわれる旧宮谷邸跡は中浜に所在する。

近世、すでに在郷町として県東部第一の商業中心地であった赤岡であるが、明治32年3月に町制を施行後も香南の商都として繁栄してきた。官庁には税務署、法務局、検察庁、警察署があり、またかつては郡役所、簡易裁判所、電報電話局も所在した。このように近隣町村の中軸をなしていた赤岡町であるが、面積はわずか約1.7km²と県下最小、人口密度は県下最大となっている。

参考文献

『赤岡町史』赤岡町史編集委員会 1980

山本大・島村要・吉田萬作・依光貫之「香美郡」「高知県の地名」平凡社 1983

森田尚宏『赤岡町埋蔵文化財包蔵地調査カード』高知県教育委員会 1988 ~ 89

廣田佳久『周辺地域における土師器の様相 - 1. 南四国の古式土師器 -』[研究紀要 第1号]財團法人高知県
文化財団埋蔵文化財センター 1994



第2図 周辺の遺跡

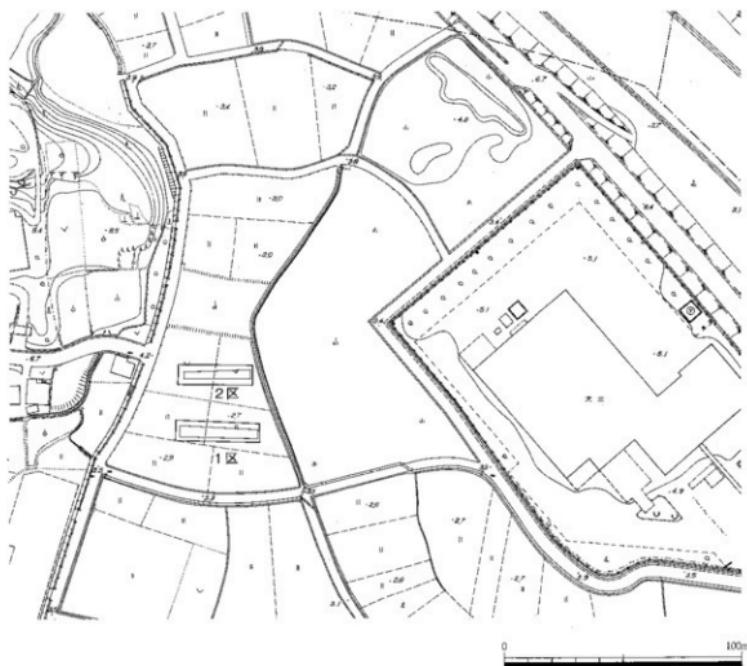
第3章 調査の成果

第1節 調査の方法(第3～4図)

平成16年5月24日より同年7月6日まで発掘調査を行なった。

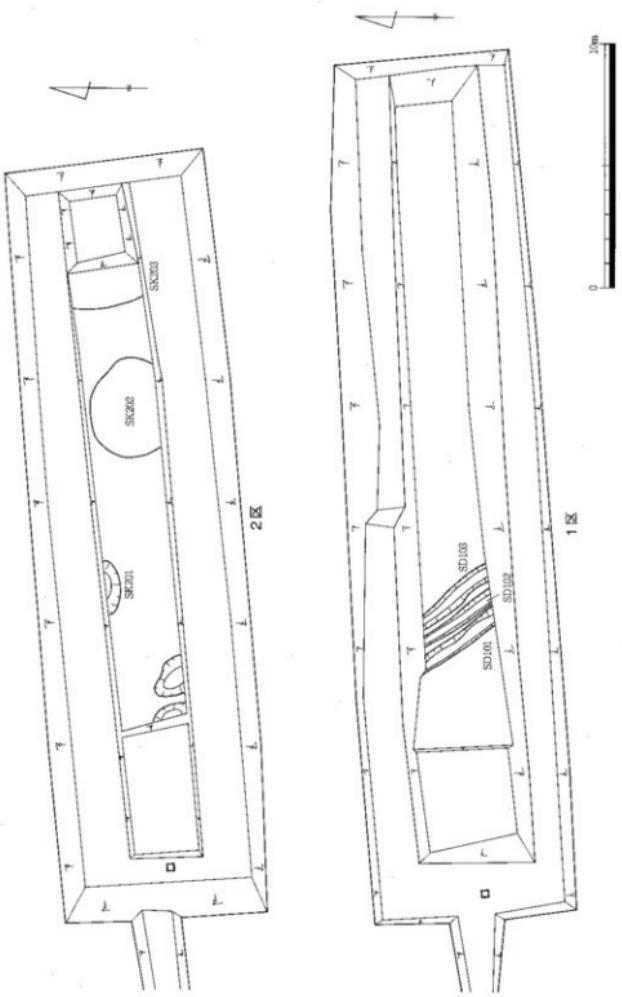
事前に実施されていた試掘調査では、調査対象地内の中央部に高さ3m以上の盛り土がなされていたため、十分な成果が得られなかった。そこで、まず盛り土を除去し、本調査に先立って予備調査として東西方向に、調査区を横断する2本のトレーニチを設定し、遺構の広がりを確認することにした。そしてその結果からさらに南北方向のトレーニチを設定して、本調査の範囲を確定することにした。

東西方向の2本のトレーニチは南側を1区、北側を2区とし、まず1区から掘削を行なった。



第3図 調査区位置図 (S=1/2000)

第4図 1区および2区邊溝配置図 (S=1/200)



1区、2区ともに現表土も盛り土であり、旧表土まで1m程度掘り下げなければならなかった。そこで1区、2区ともに最初に、設定するトレンチより一回り広く盛り土層を除去し、その後重機を旧表土面に降ろして検出面まで掘削した。

1区は盛り土層除去後、西端に深掘りを行なって下層の確認をすると同時に、重機掘削の深度を決定した。その結果、1区、2区とも機械掘削は旧表土下約70cmの暗褐色の包含層上までとし、この面で入力による構造検出と掘削を行なった後、包含層の人力掘削を行なうこととした。

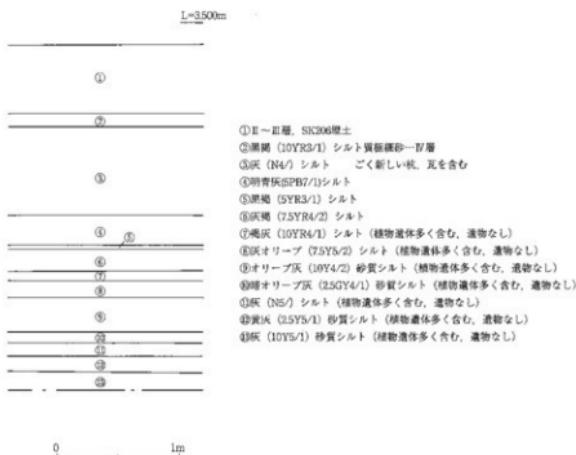
なお、2区については包含層掘削の終了後、東端を深掘りして層位の最終確認を行なった。

それぞれのトレンチの規模は、1区が35×8m、2区が31×8mで両調査区間の距離は約25mである。

第2節 層序(第5～6図)

I層は盛り土層、II層は旧表土である。

III層、IV層ともに遺物の包含層であり、ともに古墳時代後期頃～中世までの遺物を含む包含層である。III層はぶい褐色のシルト質極細砂であり、IV層は黒褐色シルト質極細砂を呈する。調査では、機械掘削をIV層上面までとしたが、その根拠は、III層は須恵器や土師器に混じって焼瓦など新しい遺物を含む包含層であり、その堆積は極新ないと判断したためである。



第5図 2区東端北壁土層柱状図(S=1/40)

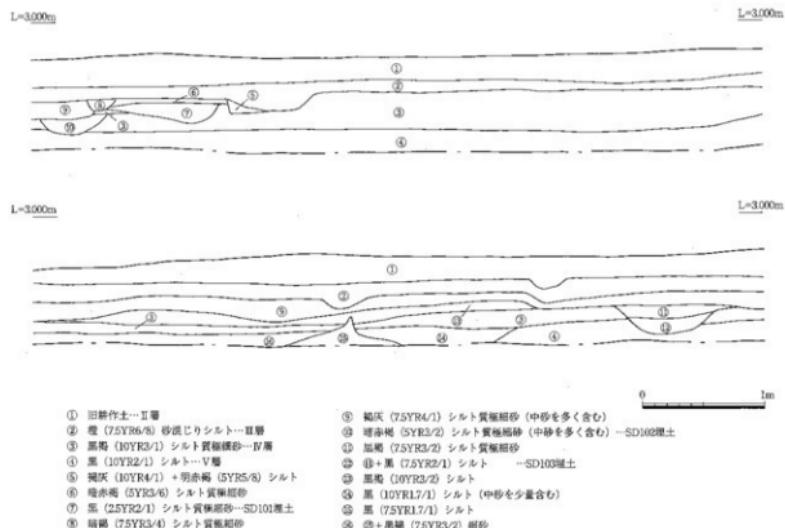
V層は黒色シルト層である。遺物は含まない。

VI層は青灰色シルト層であるが、この層中より燃し瓦片および樹皮や木芯のしっかり残った木杭が無造作に投げ込まれた状態で出土している。したがって、この層が第1章で述べた粘土探査坑が形成していた池であると考えられると同時に、粘土探査坑は調査区全体に広がっていたものと思われる。

VII層は薄く堆積する黒色シルト層で、粘土探査坑が形成していた池の底である可能性もある。

VIII層以下は植物遺体や加工痕の見受けられない木材を多く含む、灰オリーブの砂質シルト層である。

以上を総合すれば、本遺跡では調査区全域にわたって層位の逆転が起こっており、粘土探査坑が埋没したあとに古墳時代後期～中世の包含層が堆積していることになる。



第6図 1区調査区南壁土層図 (S=1/40)

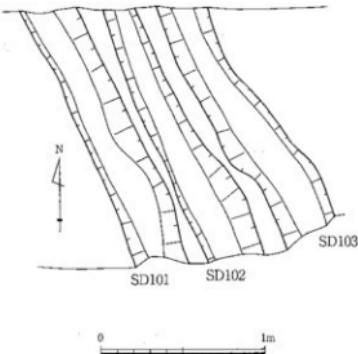
第3節 検出遺構

1区

SD101～103(第7図)

1区の西端付近、深掘り区の東端より約4mで検出した溝跡である。IV層上面に3条が隣接して掘削されており、西からそれぞれSD101、SD102、SD103とした。トレチ幅でしか検出を行なっていないが、溝幅はそれぞれ0.3m、0.25m、0.3mを測る。3条すべてが同一主軸をとる。

これらの溝からの出土遺物は細片のみであり、図化できるものはなかった。



第7図 1区SD101～103平面図(S=1/30)

2区

SK201～203

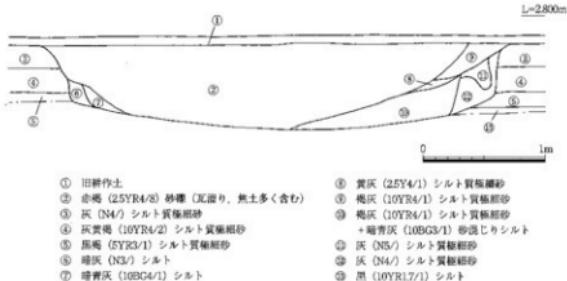
検出した土坑はいずれも近現代の桟瓦の失敗作や焦土、耐火煉瓦が投げ込まれた廃棄土坑であり、旧表土(II層)直下より掘り込まれている。

SK201

調査区西端から10mの位置で検出し、IV層上面ではわずかに床面が残るのみである。

SK202(第8図)

調査区東端から約7mの位置で検出した土坑で、南壁沿いに東西方向および中央部に南北方向



第8図 SK202 土層図(S=1/40)

にレンチを開口して床面を確認した。検出面での復元径は約4m、掘削面から床面までの深さは0.7mである。

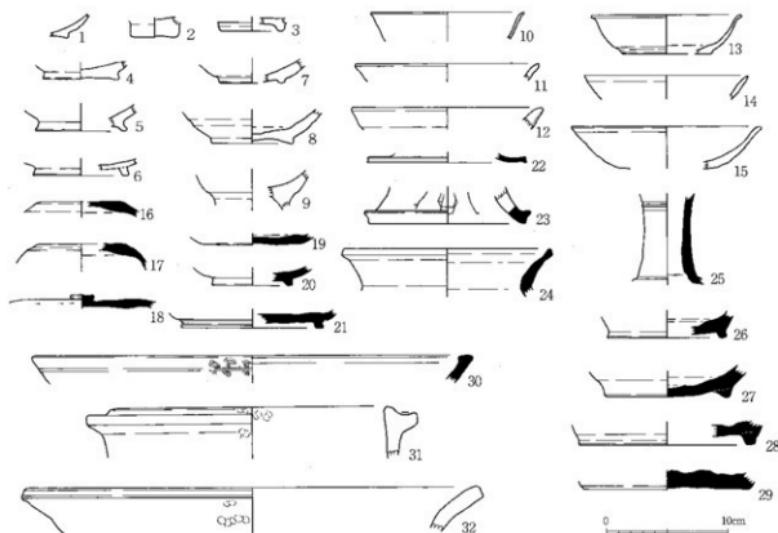
SK203

2区東端付近で検出した土坑で、一部が調査区東端の深掘りレンチにかかる。この土坑について、具体的な掘削は行なっていない。

これらの他にも、同様な土坑が2区西端に見受けられたが、規模や範囲は確認していない。

第4節 出土遺物(第9図)

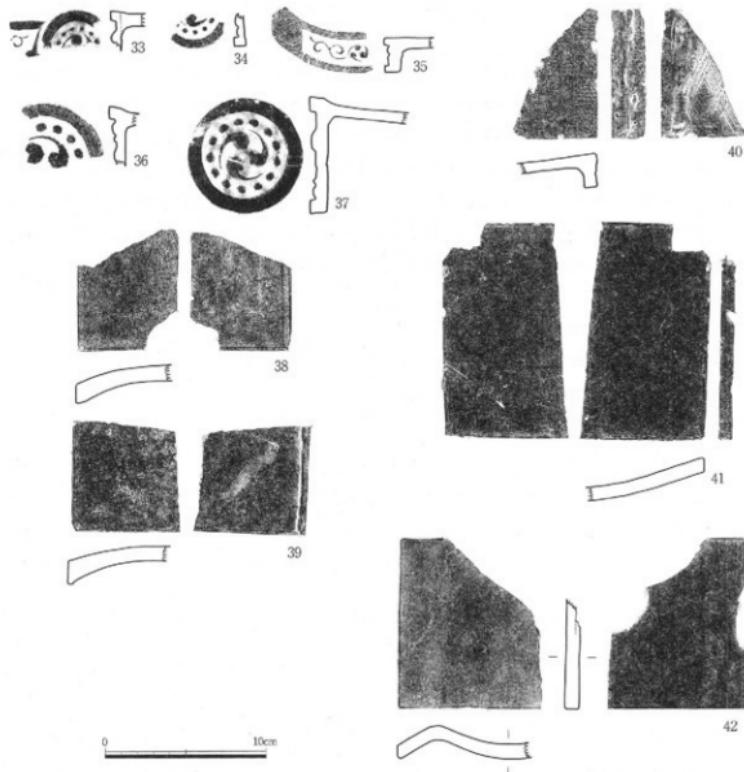
出土遺物は点数が少ないとこと、大半が包含層出土であることから第9～10図に一括掲載とした。1～15は土器である。1、4は円盤状高台を持つ。1は底径に対し $1/4$ 程度が現存しているが、変形のため径を復元することができなかった。4は1に比して厚手である。底部に回転糸切りが確認できる。2は柱状高台である。3は灰釉陶器である。高台の形状からK14窯式の範疇と考え



第9図 出土遺物(1)(S=1/4)

られる。高台内面が剥離している。5は下方に広がる、尖った三角高台を有する。6は高い高台を持ち、断面は長方形である。7は低平な、8は断面三角形の輪高台を有する。10は椀の精製品である。11、12は口縁部でやや外反する口縁部を持つ。11が薄手であるに対し、12の器壁は厚い。13は坏である。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。14は直線気味に聞く口縁部である。15は内湾気味に立ち上がる体部から直線気味に聞く口縁部を持つ。

16～30は須恵器である。16～18は坏蓋。16、17は古墳時代の所産である。口径は不明ながら天井部外面にヘラケズリが見られないことから、陶邑編年^①におけるTK217(古)に近い時期のものであると思われる。18は天井部外面に扁平なツマミを有する。飛鳥V期^②に近い時期の所産と思



第10図 出土遺物(2)(S=1/6)

われる。19～21は壺底部である。19は古墳時代のものであるが、底部はヘラ切り未調整である。21はしっかりした高台を有するが、端部を外方へ拡張する。高台の付け根部分に沈線が見られることから、削り出しと思われる。20は底径から楕あるいは皿の底部であろう。「ハ」の字形に聞くしっかりした高台を有する。22は水平に聞く脚部で、端部をナデによって下方に拡張する。23は円面観の脚部である。スカシ2孔が現存し、端部は上方に拡張する。24は壺である。緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。25～28は壺である。25は頸部であり、上部には2条、下部には1条の沈線が巡る。26～28は底部である。26、27は丸底に、28は平底に高台を付加したような形状を呈する。高台の断面形状は26、28が方形、27は三角形である。29は底部で、壺であると思われる。30は口縁部であるが、脚部であるかもしれない。端部を内方に拡張し、外面には波状文が施される。

31、32は土師質土器である。31は羽釜で、やや上方に断面方形のしっかりした鋤が水平に広がる。内外面に指頭圧痕を確認できる。32は鍋である。外面に指頭圧が施される。

33～35は軒棟瓦である。33は棟の、いわゆる「マンジュウ」部分に巴文を施したもので瓦当面には唐草文が残る。34は巴文が施された「マンジュウ」のみ、35は瓦当面の中心に巴文、その両側に唐草文が施されている。36、37は軒丸瓦である。巴の周囲に珠文を巡らせている。38、39は熨斗瓦である。凹面には瓦の落下を防止するための櫛描きの沈線が無造作に描かれている。40は側面に瓦当面を持ち、袖瓦あるいは目板瓦であると思われる。内面に施される格子状のカキメは熨斗瓦同様、すべり止めであろう。41、42は棟瓦である。41は角部を切り欠き、また端部付近に釘穴が穿たれている。これらの他、耐火煉瓦や窯詰めの際に使用する「楔」などが出土している。

註1 田辺昭三『陶邑古窯址群』1965

田辺昭三『須恵器大成』1981

註2 「古代の土器1」「都城の土器集成」古代の土器研究会 1992

第4章 まとめ

調査前に地元住民に伺ったところでは、かつて当遺跡内で瓦製造のための粘土を採掘していたらしく、その採掘坑が大きな池を形成していたようだ。当然、遺跡も大きく搅乱されていることが予想された。

発掘調査の結果は、結論を先に言えば層位の逆転が起こっていた。大東遺跡では、燃のかかった新しい黒銀色の瓦や樹皮・木芯のしっかり残る木杭が投げ込まれた層(VI層)の上に古墳時代～中世の遺物の包含層(IV層)が堆積していたのだ。そしてVI層が、粘土採掘坑が形成した池の埋土であると考えられる。従って発掘調査の結果と、調査前に地元住民から伺った話を総合すれば、大東遺跡の古代～中世の包含層は昭和のある時代に埋没した「池」の上に堆積していることになる。

IV層からの出土遺物は細片が多い。しかし磨滅は少なく、流されてきた遺物の移動量はごく少ないと考えられる。このことから大東遺跡付近に古代～中世頃までの遺跡の存在を想定することができる。

ところで2区で確認できた3基の土坑(SK201～203)からは多くの瓦片に混じって耐火煉瓦や大量の焦土が検出されている。瓦片も焼成不良や固着などの失敗作あるいは窯詰めの際に使用する楔や耐火煉瓦などが多く投棄されていた。このことと粘土採掘坑の存在から、付近で瓦製作が行なわれていた可能性が高いと考えられ、土坑は窯を破壊してその残骸を埋めたものであろう。

町史によれば、赤岡町の瓦作りは元禄年間頃に始まったらしい。その詳細は不明であるが、後の明治12年段階で瓦の生産量は八千枚となっている。なお、同年の資料「民業」で町内に「工」業に從事する戸数は37戸あり、その職種は「大工 左官 樽屋 錫治 竹細工 製服 等を業とするものの類」とあり、瓦工は明記されていない。この点から類推すれば、赤岡町内において、瓦作りの規模は非常に小さかったといえるだろう。ちなみに明治4年の「瓦師」の課税額は二分であったようだ。

赤岡町の瓦作りについては不明な点が多い。ここでは大東遺跡付近で繰り広げられた瓦作りについて、出土遺物を中心と考えてみたい。

瓦の焼成は中世以降、昭和40年頃のガス窯の出現までは達磨窯が用いられた。確認はされていないが、大東遺跡でも達磨窯が用いられていたことは確実であろう。

ところで出土遺物には、何点かの耐火煉瓦が見られる。この煉瓦はいずれも暗青灰色系の色調を呈するが、これは他の地域に見られる煉瓦同様、窯の部材として用いられたものと考えられる。一般的に耐火煉瓦が使用される部位は、ロストルを含めた床面や障壁部分が主体となる。窯全体にそれを用いない理由は、窯の保温が良すぎる点にあるようだ。ちなみに耐火煉瓦の渡来はいわゆる「文明開化」期であり、その製作には瓦工が携わった。達磨窯への耐火煉瓦の採用時期についての詳細は不明であるが、やはり文明開化の頃とみなすのが妥当であると思われる。

次に出土瓦についてみてみたい。

現在の棟瓦はプレスによる一体成形であり、縦方向の端部は丸みを帯びている。一方、大東遺跡出土の棟瓦は縦方向の断面が直線的で、プレス成形でないことが想像できる。また、縦方向の端部中央に瓦のズレを防止する「ケン」を持たない。「ケン」の出現は関東大震災を嚆矢とし、以前は貼付によって、現在では成形時に同時にプレスによって付される。

軒瓦の瓦当文様については新旧に大きな相違はない。ただし使用する型については、古代以来使用されてきた木型に変わり石膏型へ、そして金型へと変遷する。木型から石膏型への移行時期については分からぬが、金型へは棟瓦の成形がプレスに変わると期を同じくし、金型は木(石膏)型に比べ文様がシャープであるといわれる。大東の出土例は木型あるいは石膏型によるものであるようだ。

以上を総合すれば、大東遺跡での瓦作りは明治年間～昭和50年代と考えられるが、地域住民の話も加味すれば、下限は概ね昭和30年代と考えてよいと思う。上限については分からぬが、赤岡町内における瓦作りの規模の矮小さからすれば、町史の言う元禄年間まで遡る可能性もあると思われる。

大東遺跡の立地、すなわち豊富な粘土の埋蔵量とタララ作りから成形・焼成に至るまでの一連の作業が可能な広大な平野、そして河川という製品の搬出条件に赤岡町の面積も加味すれば、大東遺跡周辺が赤岡町内で唯一瓦生産が行なわれた可能性も高いと思われる。

今後の発掘調査によって周辺地域における瓦作りの様相の解明が待たれるところである。

参考文献

『赤岡町史』赤岡町史編集委員会 1980

藤原 学『達磨窯の研究』学生社 2001

山田 幸一 他「和瓦のはなし」「物語・ものの建築史」鹿島出版社 1990

山田 幸一 他「屋根のはなし」「物語・ものの建築史」鹿島出版社 1990

大東遺跡出土瓦および瓦作りについては、下記の方々の御教授を得た(敬称略)。

津田 光利 菊間町窯業協同組合

中川 實雄 (株)本家アキ實製瓦所

遺物觀察表

土器類

| 調査 場所 番号 | 調査 区 | 層位 遺構名 | 種類 | 現存部位 | 現存率 | 寸法(cm) | | 底形および側面抹法 (外型/内型) | 施文の特徴 | 色調 (外型/内型) | 胎土 | 焼成 | 備考 | |
|----------------|---------|-----------|-----------|-------|--------------|--------|-------|-----------------------|------------|-----------------------------------------------------|--------------------------------|---------------------|----------------------|--|
| | | | | | | 口径 | 器高 | | | | | | | |
| 1 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 底部 | 破片 | (2.0) | | 壺底(凹面ナラ)/斜板ナラ | 円盤状高台 | 赤褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密 | 良好 | | |
| 2 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 底部 | 柱状高台 のみ保存 | (1.7) | 4.0 | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | やや密・0.5mm以下の 長石、微砂を多く含む | 良好 | | |
| 3 | 2区 | II層 | 灰陶脚器 | 底部 | 1/4 | (1.2) | 4.8 | 脚板ナラ/脚軸ナラ | | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密 | 良好 | 施文 | |
| 4 | 1区 | II層 | | 底部 | 1/2 | (1.4) | 6.2 | 壺底(不規/不明) | 施文無 | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密・微砂を含む | 良好 | | |
| 5 | 2区 | SK201 | | 底部 | 1/3 | (2.2) | 7.4 | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密 | 良好 | | |
| 6 | 1区 | II層 | | 底部 | 1/4 | (1.4) | 7.8 | 壺底(頭底ナラ/不明) | | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密 | 良好 | | |
| 7 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 底部 | | (2.6) | 5.4 | 壺底(不規/不明) | | 赤褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | やや粗・微砂をこぐ少 量含む | 良 | | |
| 8 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 底部 | 1/2 | (2.8) | 6.8 | 壺底(頭底ナラ/頭板ナ ラ) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | 密・微砂を少含む | 良好 | | |
| 9 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 底部 | 1/2 | (3.3) | | 壺底(不規/不明) | | 赤褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) / 灰褐色(25YR 7/2) | やや密・0.5mm以下の 長石、石英を少含む | 良好 | | |
| 10 | 2区 | II-Ⅲ層 | 筒 | 口縁部 | 破片 | (2.0) | (2.3) | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 7/6) / 灰褐色(25YR 6/2) / 灰褐色(25YR 7/6) | 密・少細孔を含む | 良好 | | |
| 11 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 口縁部 | 1/12 | (3.0) | (1.4) | 壺底(不規/不明) | | 赤褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) / 灰褐色(25YR 6/2) | 密 | 良好 | | |
| 12 | | II-Ⅲ層 | | 口縁部 | 1/16 | (3.0) | (1.7) | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | やや粗 | 良好 | | |
| 13 | 1区 | II層 | | 口縁一部部 | 1/3 | 12.5 | 3.2 | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | 密・微砂を含む | 良好 | | |
| 14 | 2区 | II層 | | 口縁部 | | (3.7) | (1.9) | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) / 灰褐色(25YR 6/2) | 密・細孔を少含む | 良好 | 内面にスス着 | |
| 15 | 2区 | SK202 | 环球陶 | 口縁一部部 | 1/8 | (0.6) | (3.4) | 壺底(頭底ナラ) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | 密 | 良好 | 内面に赤(10R 8/2) が残る | |
| 16 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 环臺 | 天井部 | 1/8 | (1.3) | 回転ナラ/回転ナラ | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | やや粗 | 良好 | | |
| 17 | 1区 | II層 | | 环臺 | 天井部 | 1/4 | (2.2) | 回転ナラ/回転ナラ | | 明褐色(5P9/1) / 明褐色(5P7/1) | 密・1mm以下の長石を 少含む | 良好 | | |
| 18 | 1区 | II層 | | 环臺 | 天井部 | 1/4 | (0.9) | 回転ナラ・ラケカリ /回転ナラ・ナラ | | 明褐色(5P9/1) / 明褐色(5P7/1) | 密・粗・細孔を含む | 良好 | | |
| 19 | 2区 | II-Ⅲ層 | 环身 | 底部 | 1/4 | (0.8) | | 回転ナラ/回転ナラ | | 青灰褐(5PB4/1) / 青灰褐(5PB6/1) | やや密・微砂を多く含 む | 良好 | | |
| 20 | 2区 | II-Ⅲ層 | 筒 | 底部 | 1/4 | (1.5) | 6.8 | 壺底(不規/不明) | | 灰褐色(27YR 6/2) / 灰褐色(25YR 5/2) | 密・細孔を少含む | 良好 | | |
| 21 | 2区 | II-Ⅲ層 | | 坏 | 底部 | 1/4 | (1.5) | 11.6 | 回転ナラ/回転ナラ | 高台上部に沈 没 | 明褐色(5PB6/1) / 明褐色(5PB7/1) | やや粗 | 良好 | |
| 22 | | II-Ⅲ層 | 高环 | 脚部 | 1/8 | (0.7) | 13.0 | 回転ナラ/回転ナラ | | 青灰褐(5PB6/1) / 青灰褐(5PB7/1) | 密・細孔を少含む | 良好 | | |
| 23 | 1区 | II層 | 内面鏡 | 脚部 | 破片 | (3.0) | 12.8 | 回転ナラ/回転ナラ | | オリーブ灰 (25GY 5/1) / 青灰褐(5PB6/1) | 粗 | 良好 | | |
| 24 | 2区 | II層 | 壺 | 口縁部 | 1/8 | (0.9) | (3.9) | 回転ナラ/回転ナラ | | 青灰褐(5PB6/1) / 青灰褐(5PB7/1) | やや粗・微砂を少含 む | 良 | | |
| 25 | 2区 | II層 | 壺 | 底部 | 2/3 | | | 回転ナラ/回転ナラ | 内面に混合痕 | 青灰褐(5PB6/1) / 青灰褐(5PB7/1) | 粗・粗・細孔を多く含 む | 良好 | 外側に自然施 (25GY 5/1) | |
| 26 | 2区 | II層 | 壺 | 底部 | 1/4 | (2.2) | 9.5 | 回転ナラ/回転ナラ | | 明褐色(5PB6/1) / 明褐色(5PB7/1) | やや粗・0.5mm以下 の長石を含む | 良好 | | |
| 27 | 1区 | I層 | 壺 | 底部 | 1/4 | (2.0) | | 回転ナラ/回転ナラ | | 明褐色(5PB7/1) / 明褐色(5PB8/1) | やや粗・微砂を多く 含む | 良好 | | |
| 28 | | II-Ⅲ層 | 壺 | 底部 | 破片 | (1.9) | 14.4 | 回転ナラ/不明 | | 明褐色(5P7/1) / 青灰(5B 6/2) | 粗・微砂を少含む | 良好 | | |
| 29 | II区 | 粘土中 | | 壺 | 底部 | 1/4 | (1.8) | 13.6 | 沈罐(1重/ナラ) | 青灰褐(5PB6/1) / 青灰褐(5B 5/2) | やや粗・細孔を少含 む | 良好 | | |
| 30 | | | | 口縁部 | | (0.6) | (2.0) | 回転ナラ/回転ナラ | 内側に波状文 | 青灰褐(5PB6/1) / 明褐色(5PB7/1) | やや粗・微砂を少含 む | 良好 | | |
| 31 | 2区 | II-Ⅲ層 | 土 器支承部 | 岩釜 | 口縁部 | 1/16 | (2.2) | (4.3) | 壺底(岩釜/指輪圧) | | 褐(10YRS 5/2) / 灰黄(10YR 5/2) | 粗・1mm以下の長石 を多く含む | 良好 | |
| 32 | 2区 | II層 | 岩釜 | 口縁部 | 1/20 | (0.8) | (3.7) | 壺底(ナラ・指輪圧/不 規) | | 灰褐色(10YRS 5/2) / 灰褐色(10YR 7/2) | 粗・細孔を多く含む | 良好 | | |

棟瓦、軒桟瓦、翼斗瓦、袖瓦(目板瓦)

| 図版番号 | 調査区 | 遺構名 | 器種 | 法量(cm) | | 瓦当文様 | | 成形・調整 | 色 調 | 胎 土 | 焼成 | 備考 |
|------|-----|-------|--------|---------|--------|------|--------------|---------------|----------------------------|------------|------|-------------------|
| | | | | 全長 | 全幅 | 器厚 | 軒 | | | | | |
| 33 | 2区 | SK202 | 軒桟瓦 | 14.3 | (13.2) | 1.6 | 唐草 | 内区に巴 外区に連珠 | 暗青灰(SPB3/1) | やや稚・微形少量含む | 良 | |
| 34 | 2区 | SK202 | 軒桟瓦 | 復元径 8.6 | | 1.6 | | 内区に巴 外区に連珠 | 浅黄(2SY7/3) | やや密 | 不良 | |
| 35 | 1区 | SK202 | 軒桟瓦 | 9.4 | (11.3) | 2.4 | 中央に巴 左に唐草 | | | やや密 | 不良 | 瓦当左端に「両口咲」の刻印 |
| 38 | 2区 | SK202 | 翼斗瓦 | (13.2) | (12.4) | 2.0 | | ナデ | 青褐(2.5Y5/6) 明青灰(SPB7/1) | 粗・砂粒を含まず | 不良 | 内面にS字状のカキメ |
| 39 | 3区 | SK202 | 翼斗瓦 | (13.5) | (13.7) | 1.8 | | ナデ | 青灰(SPB6/1) | 粗・砂粒を含まず | やや不良 | 内面に逆「く」字型のカキメ |
| 40 | 2区 | SK202 | 袖(目板)瓦 | 16.2 | (16.4) | 1.3 | | ナデ | 青灰(SPB2/1) 灰白(2.5Y4/1) | 密 | 不良 | 内面に巻子状のカキメ |
| 41 | 2区 | SK203 | 棟瓦 | 26.8 | (15.1) | 1.6 | | ナデ | 暗青灰(SPB4/1) | 粗・砂粒を含まず | 良 | 端部に鉢穴 上端角を切り欠く |
| 42 | 2区 | SK202 | 棟瓦 | 21.6 | (17.0) | 1.9 | | ナデ | 暗青灰(SPB3/1) | やや稚 | やや不良 | |

軒丸瓦

| 図版番号 | 調査区 | 遺構名 | 法量(cm) | | 瓦当の文様 | | | 調整 | 色 調 | 胎 土 | 焼成 | 備考 | |
|------|-----|-------|--------|--------|-------|----|----------|----|-----|-------------|----------|----|-----------|
| | | | 瓦当径 | 全長 | 器厚 | 内区 | 外区 | | | | | | |
| 36 | 2区 | SK201 | 14.6 | (12.4) | 1.4 | 巴文 | 連珠文(13) | 無紋 | ナデ | 暗青灰(SBG3/1) | 密・砂粒を含まず | 良 | 瓦当が焼成時に被損 |
| 37 | 2区 | SK202 | (14.2) | (3.9) | 2.5 | 巴文 | 連珠文(現存4) | 無紋 | ナデ | 青灰(SPB6/1) | 粗・砂粒を含まず | 不良 | |

棟・耐火煉瓦

| 図版番号 | 調査区 | 遺構名 | 器種 | 法量(cm) | | | 成形・調整 | 色 調 | 胎土 | 備考 |
|------|-----|-------|------|--------|-----|-----|-------|-------------|----|--------------------|
| | | | | 全長 | 全幅 | 最大厚 | | | | |
| 43 | 2区 | SK202 | 棟 | 5.6 | 2.6 | 2.7 | ヘラ切り | 暗青灰(SPB3/1) | 密 | 写真図版5 裏面の1箇所が白い |
| 44 | 2区 | SK202 | 棟 | | | | ヘラ切り | | 密 | 写真図版5 |
| 45 | 2区 | SK202 | 耐火煉瓦 | 17.0 | 3.5 | 6.5 | | | 粗 | 写真図版5 |
| 46 | 2区 | SK202 | 耐火煉瓦 | 16.7 | 3.4 | 6.4 | | | 粗 | 写真図版5 |

写真図版



調査区全景(東から)



調査区全景(北から)

写真図版 2



1区完掘(西から)



2区完掘(東から)

写真図版 3



1区北壁土層



2区北壁土層



SD101 ~ 103



SK201



同 土層



SK202

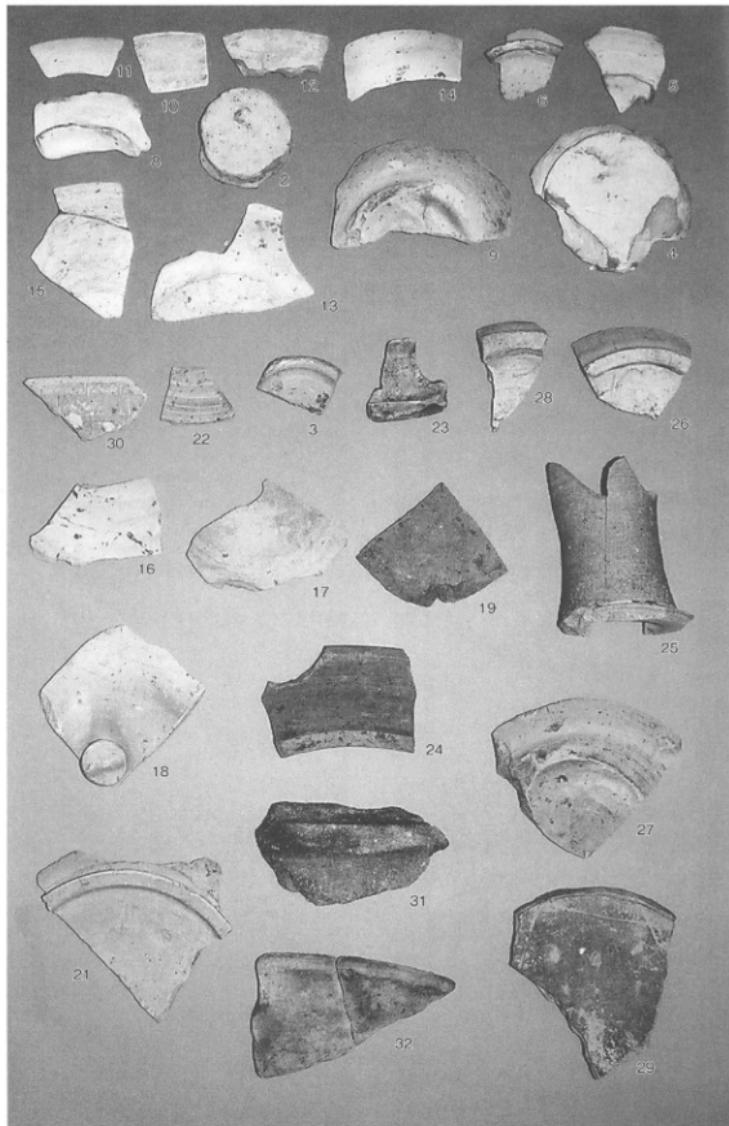


発掘作業風景



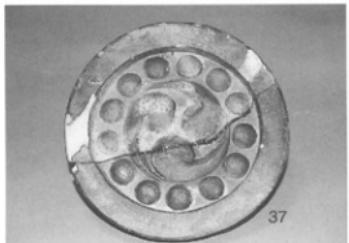
2区東端深掘り

写真図版4



出土遺物(土器)

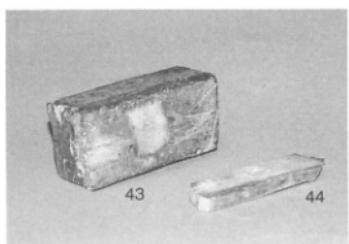
写真図版 5



軒丸瓦



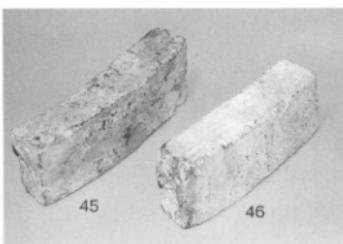
軒棧瓦



43



44



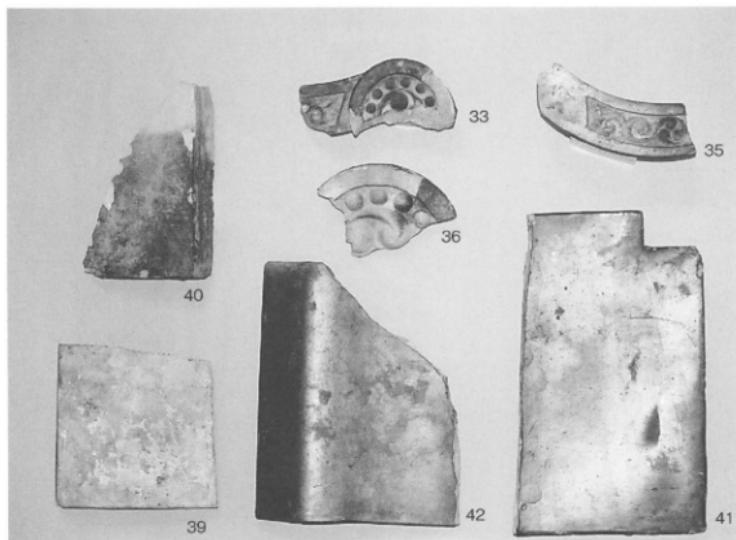
45



46

楔

耐火煉瓦



39



33



36



42



41

出土遺物(瓦類)

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|------------------|-----------------------------------------------------------------|----------|--------------------------------------|---------------------------|-------------------------------|------|------------------------|------|
| ふりがな | | おおひがしいせき | | | | | | |
| 書名 | 大東遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 卷次 | 2005.3 | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編集者名 | 松田重治 | | | | | | | |
| 編集機関 | 大旺建設株式会社 | | | | | | | |
| 所在地 | 高知県高知市丸の内2丁目8-30 | | | | | | | |
| 発行機関名 | 赤岡町教育委員会 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2005年3月31日 | | | | | | | |
| 総頁数 | 月次等 | 本文 | 観察表 | 図版 | 写真枚数 | 挿図枚数 | 付図枚数 | |
| | | | | | | | | 0 |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | °°° | °°° | | | |
| おおひがしいせき 大東遺跡 | こうちけん 高知県 かみぐん 香美郡 あかおからとう 赤岡町 あかおかのまち 字大東 | | | | 4.5.24 ～ 5.3.31 | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 大東遺跡 | 包含層 | 近～現代 | 古墳時代後期～ 中世の遺物を含む 包含層 瓦窯廐棄土坑 | 須恵器、土師器、 棧瓦、耐火煉瓦 など | 達磨窯を破壊し、投 棄したと見られる土 坑3基 | | | |

大東遺跡

2005年3月31日

編 集 大旺建設株式会社
高知県高知市丸の内2丁目8-30
発 行 赤岡町教育委員会
印 刷 有限会社西村謄写堂